



ル4  
3776  
巻 6

昭和二十六年  
二月十五日  
購

○醫王山光福寺金藏院

リ上久世

号藏王堂

此王位現立像其人後約其の

付岡長寺淨花を新入天曆年

子貴宗不立淨山大掌事入若修し

てかつんとそ彼山花王位現の

實宗小龍寺法修を付少修

現息息と現れむい汝を小

法修をむむ神妙をり今汝

即ふくく八家も初て水く若縁

のられ生まれちんもてを新刊

考り多負よりしに忽ち修て

本像とちりうた中入道をもて

け代おやれば花王のそ像たる  
のどくくありて動かさむらぶら  
名縁の化たりと悟りけり  
みよとくよりたふと口夜西の  
方少たるらる椰生ども又天  
老翁ありけれけ椰ふらいて  
弁多を醫王言述と唱へて  
浄土を新とれとくくは海に  
弁天降降の地より今何か  
ふかた現は地ふありたす  
あく佛國と建て安住せば  
村の直度たるらんとも終て  
きふぬまふふくくの事さ  
さかりしより一寺を建て  
縁

あまをりしらん  
もとほはるのつた

○久遠寺 号西山法坊  
首跡柱の西行あり

西ちあふん野寺の清色たる  
宇多徳三代管見如人の四建立  
列上人の四廟中一の修り毎  
この八月奉りた八の修り修り  
ありたる寺を修りて千くの西  
とくそのあり早のひ五人此  
西を新りて西を乞へるを  
ありとく一とせ給ふ系も寺ふ  
細りふち内修りて止む  
ひてえのどくく細く又高村  
ありとくハケチくと修りて

つていゝりりり

日山城丹波の境峠よりり

○大枝山大福寺 信峰の地蔵堂

宇治名天台本尊の地蔵堂を以て  
の地蔵菩薩市盛本尊の形を以て  
て死を免修治の行年より成  
仏して好永く廻転を祈りんと  
誓ひて地蔵堂を築き世に  
を乞ひ修治せしめしる栢の  
折りてあつたふりてかゝる子安の  
地蔵と云ふ

日蓮宗の山よりあり

○土の如寺

宇治名法華本尊を以て

余意を大伴能あるえ々の代  
より二丁よりあり万治年中  
妙信寺二世日通上人再興有

日蓮宗の山よりあり

○羊山山浄信寺

宇治名芙蓉山本尊を以て  
七の寺より天皇の御  
地蔵の御像を以て  
の法牛再建して

日蓮宗の山よりあり

○西芳寺

宇治名後醍醐天皇  
太子の御像を以て  
善徳の御像を以て

國師の住して四村の邊に風  
光潑々ありと九人の禪師  
ありあり

○最福寺 口松の尾の南に在り  
あり

宇治の津古なる何法住の末  
宗春延願寺あり

○真藏寺 日月渡の南に在り  
竹林の中あり

此の寺は延願寺の住持の  
名に因りて名は風潭とあり  
建して此の尾にありと稱して  
真藏寺と改めたり此の寺の  
破壊世人知るところなり

口松の村あり

○大梅山長福寺 寺の南に在り  
宇治の津古なる禪師の末に  
のりて創して開基は日月神大権  
國師あり

○海生寺 口松の村あり  
竹林の中あり

宇治の津古なる禪師の末に  
海山禪師の末にありとあり  
常小市町と稱する此の寺の  
車傍にあり又七百某の年  
の事と傳ふありとありとあり  
これもありしとありとあり  
今ある菴のこゝあり

○大森廣隆寺 日くづきまけりあり ちん喜石

此寺名之傳ま言る高僧子也  
其何如来日向神の世也  
之平日向云日向神の社  
喬木ありあり日人あり  
此寺を伐其社を焼く  
神威入りて人感  
て此寺を造りて大森の寺  
河ありて感念  
其河邊好丹傳ふ石也  
之好法和帝勅して高寺の  
本寺とやたす。高寺ハ上  
古推古天皇十二年八月大和

○大森廣隆寺 日くづきまけりあり ちん喜石

此寺名之傳ま言る高僧子也  
其何如来日向神の世也  
之平日向云日向神の社  
喬木ありあり日人あり  
此寺を伐其社を焼く  
神威入りて人感  
て此寺を造りて大森の寺  
河ありて感念  
其河邊好丹傳ふ石也  
之好法和帝勅して高寺の  
本寺とやたす。高寺ハ上  
古推古天皇十二年八月大和

佛が中興して三徳のありて云  
細至高幸ふ左子の善教を空  
地より又これとあるこの徳あり  
く不付資事無とれ六時と

○三倉院

口大井川辰月松のあり

多名種なきは勅仏坐徳あり  
とて飛山法皇の徳居て建武の  
後醍醐帝より室山善相と建  
徳より後の徳は善相の徳と

○雲山山隠川寺

右の所

祿十利の善よりなりは勅  
る應永元年将軍義満の

建武より開山善相の徳あり

○鹿王院

口木のありあり

字多名種なき善相の徳あり  
善相の徳ありは善相の徳あり  
ありて善相の徳あり

大のあり辰月松のあり

○智福山法瑞寺

字多名種なき本寺の徳あり  
道昌法皇の徳あり

口建武より善相の徳あり

古の道昌法皇の徳あり  
徳あり。徳ありは徳あり  
の徳ありは徳あり

小待れハ多敷とて後近のよそ  
張多し

丸山のゆふの山と

○大悲閣 辰月拾五壬午年

中よりふ子認るもん他 張壇亦  
角念了の像を安んじけ人  
大井川 巖石を切てお身修より  
お代ををうのるをそくそく  
口より後内碑 張より

右白木 大井川末ち辰子 吉井茶

○灵龜山天龍資聖禪寺

字名 禪ふ山の身入 中より新由  
并基 弓想西河 歴三年是利  
弓氏将弓子の中 然して 河野 常

進福のくらし建より

日向金山の巖

○常寂寺 聖の宮の西より

字名 日蓮 中より 新由 多敷の  
二より 弓 聖 日 禪 上人より

日向金山より 中より 昇石

○小倉山蘇摩寺 二宮 教院

字名 天台 中より 律 浄土 多敷  
本号 二神 小 禪 迦 由 法 尼 共 小  
春日の他 張壇 皇 井川 新 幸  
の時 並る 紀 隆 地 より して 不  
と 迎 ぎ さい 華 意 ち 号 二 号  
教 院 と 号 せ り 好 じ 礎 常  
の 皇 子 善 徳 教 主 け 遠 三 山 泉 水 院



管々たるし雄苑殿と稱は  
まほ法為上人用名したまひて  
ええのほ一字<sup>きん</sup>概範の七條を述  
けいゆ子百八條を人ま割をとり  
たまふ。尚らまゝ物はあて人ま  
の四新は月臨深足下上人の四  
新密<sup>ひそ</sup>まうけさんとて西工法所  
宅摩ふ令て上人<sup>り</sup>体悟よりか  
たまふ秘を名属中より密より  
うつらふ一方の<sup>あ</sup>是を<sup>さ</sup>秘をとり  
而後け新を上人<sup>さ</sup>アせぬふ  
大死ふ秘より平懐の形よりと  
持命一のま<sup>あ</sup>秘とてま<sup>あ</sup>秘  
て秘一のま<sup>あ</sup>秘とてま<sup>あ</sup>秘

日本小倉山小の秘<sup>あ</sup>

○三宝寺往生院

宗名浄土清浄らふ属本名  
阿弥陀佛立像一人平用基  
良法上人より

日本三皇寺の山際

○妓王寺往生院

宗名浄土尼傍住持本名  
阿弥陀佛立像一人斗法堂云  
妓王妓女佛刀自の傍あり

日本小倉山小の秘<sup>あ</sup>

○延壽寺

宗名浄土一て本名阿弥陀佛  
徳慶の秘あり

○生六道 口不活淨土の成す

字名禮本より地蔵菩薩立  
像三人斗少許公堂の結し地と  
生の六道と号すこと堂宜と  
往來せし地相行よ、六波羅の  
東方に陳をよりより即ち  
ふはけぬより現せしれし

日小倉山定通の山莊の

○中屋観音 中の院町あり

本寺の観音、定通の山莊に  
あり。當時長少あり、此の  
ありし、すありしが或時  
打もこれ打ち、小漢字

一通ありて観音の由来定通  
口の寺にありし、ありありて  
今泉系子関及ひり、ありあり  
あり、ありあり

口不活山の名

○五尊山法華寺 古徳あり

字名禮本より釋迦佛立像  
あり、此方天竺毘首羯磨の他  
三回を双の靈佛ありて佛を世  
うほし、ありの生戒のそ像  
佛切利天ふやりのあり、ありあり  
此の像を赤梅檀をりて彫  
あり、紙圓結令よりあり、佛  
天より、ありあり、ありあり

知深しうらなもみ新金ふ入の  
佛入滅好祇園結金ふまじり  
宋の世小唐ちくくはむ朝  
一多位のし守チ安ちちの府院  
有然入庵一其音をともゆて  
感治一帰州存 天極少連  
永延元年八月 他蓮蓮僧  
て法深ちと号 山と常も縁を云

日本大派の両あり

○大覚寺御門主 御願ふ珍吉長  
御字旨言佛殿ふ八五大多  
安至と名弘法大師の世用  
ハ淳和帝弟三の皇子恒寂法  
師あり御代法親王清俊殿

日本皇太子細谷と云

○祥鳳山直指庵 秘ふあり  
字名祿 黄檗流 本号新加  
佛坐像 隆元和尙の法嗣  
笑和尙の草創なり

日本双くまあり

○五位山法全刹院 寺名寺名石  
字名台 睿法源 寺名寺名  
双立寺 又天安寺と号 法本号  
阿保位仏坐像 八人春日の他  
此他ハ旧法系と云人寺の別荘  
寺りそ男右府尾雄と云ふ  
るそ伽藍と建らるそ法大  
法の中行聖門尾再無あり

龍寺の古本也のゆゑ  
○山法山妙心寺 三の四角九段一石  
宇多御本多の御佛坐像  
三人御守斗た子少の枯花  
微笑の相 花園上皇の御飲  
建武四年卅創開山園成内  
大徳園内の上皇をり

日清室より御佛坐像を奉  
○大内山仁和寺 時所三号南内室  
御坐名三言 金堂本号 阿  
比陀佛坐像を奉 仁和年  
御建立して 宇多帝御坐家  
の御延をばえの御坐を建てる  
られり 又承平の御門は出家

まじりて存御坐よりあり  
とるん御門跡の寺の御坐  
清代は法親王御坐をり

日本に在る御坐のあり  
○万年山法親王 古御坐十石  
宇多御本相國寺に属を奉  
新御佛坐像を奉 宇多御坐を  
奉 開基者御坐をり  
先皇御坐御坐を奉 御坐を  
御坐の御坐とる 御坐と  
御坐をり

日清御坐の御坐あり  
○万年山法親王 古御坐十石

字多殺不<sup>レ</sup><sub>レ</sub>他<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>善<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>坐<sup>レ</sup>像  
二人<sup>ノ</sup>守<sup>レ</sup>運<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>坐<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>載<sup>レ</sup>す  
閑<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>想<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>則<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>氏<sup>ノ</sup>  
建<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>あり

口<sup>ノ</sup>在<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>南<sup>レ</sup>あり

○大雪山龍安寺 正徳<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>龍<sup>ノ</sup>石  
字多殺不<sup>レ</sup><sub>レ</sub>秋<sup>レ</sup>運<sup>レ</sup>仙<sup>レ</sup>開<sup>レ</sup>基<sup>レ</sup>と  
美<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>和<sup>レ</sup>尚<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>年<sup>ノ</sup>者<sup>レ</sup>細<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>翁<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>造  
嘗<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>社<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>別  
莊<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>揚<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>乞<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ  
眞<sup>レ</sup>山<sup>ノ</sup>他<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>殺<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>不  
他<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>部<sup>レ</sup>り  
て<sup>レ</sup>雪<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>は  
於<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>宮<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>あり

信<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>乾

○鹿苑寺 号<sup>ニ</sup>金<sup>ノ</sup>園<sup>ノ</sup>寺<sup>ト</sup> 古<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>石

字多殺不<sup>レ</sup><sub>レ</sub>佛<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>像<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>跡  
後<sup>レ</sup>仙<sup>レ</sup>坐<sup>レ</sup>像<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>跡<sup>ノ</sup>他<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>元<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>符<sup>ノ</sup>字  
義<sup>レ</sup>海<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>坐<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>永<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>年<sup>ノ</sup>不  
之<sup>レ</sup>園<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>一  
金<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>一<sup>ノ</sup>面<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>園<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>り  
他<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>実<sup>レ</sup>九<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>海<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>る  
岸<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>今<sup>ノ</sup>全<sup>ノ</sup>園<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>て  
一<sup>ノ</sup>て<sup>レ</sup>梅<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>貴<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>全<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>風<sup>ノ</sup>凰<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>對<sup>レ</sup>亦  
一<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>水<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>潮<sup>ノ</sup>音<sup>ノ</sup>洞  
と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>才<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>鬼<sup>ノ</sup>竟<sup>ノ</sup>頂<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>す

○み智山蓮華峰寺 明<sup>ノ</sup>徳<sup>ノ</sup>あり

宇治古言律いぬりし仁む  
の列虎あり荒廢して年いさし  
明暦年中に改元江戸の住人  
極口平を又舟具して山より  
石彫の五智の如來坐像五人  
こりりると安座し一木をさす  
不動 観音 地藏 弥勒の坐像  
と並びその小単標法海の坐  
この像は木金あり者にて佛工の  
りあり

○天香山妙光寺 日本あり

宇治多禪寺を新迦佛座像  
とてくす 開基法隆國師あり

初八因古臣作像の本宮右女ねた年  
初名妙光進福のたれ列座と寺と  
なり 妙光様と号は中興天皇  
の御代よりくらの山よりあり 印金  
本堂内ハ四方より金と押入とれ  
高寺の寺の観とと

○五蓋山般若寺 尾羽澤村ありの山あり

宇治古言なる文源大坐像  
八寸の古柳子或人厨子中より  
世傳あり 竹居住僧上人  
竹居住僧坐像五人并延く  
年中大に金剛相位建立あり  
宇治古言なる仁むのあり

○金映山三寶寺 日本館の山よりあり

字少名法名母 本寺は新迦伊豆像  
七人余運慶他用春中西院  
日護此人の像と傳ふるも有  
當山の法名像自他より一圓と云  
宅摩塚ハ三寶寺の門より雄  
路傍の右あり

○福田寺 日西兩山愛宕山よりあり

字少名淨土本寺は日護法名像  
少人より運慶の化

○朝日山白雲寺 日本館の山よりあり

字少名天台寺言急字本殿ハ  
是字名大體現と云ふに本殿ハ  
將半地元の岳改りて寺殿  
法火の守護たり初修地有  
う草平小なるまに天皇の御宇  
天皇應えり慶徳法原此山と用  
勅傳したまふ也

○鎌倉山月輪寺 日本館の山よりあり

字少名天台寺言急字本殿ハ  
銀名立像立人平用長慶像  
法原中興九葉堂白大段大長  
急堂より祖師堂ハ觀音  
五人月輪殿下堂也上人の

像あり。重宝。五丁のさく  
大樹あり。四季も指しり。高  
くくさるる。世あり

○高雄山神護國祿寺 古伝百廿石

字名を言わざる。業作仏立像  
古く牙厨子。安んず。弘法大師  
白檀よりつて。能く。仁帝の  
浄土。和名。清磨。美びりて  
建立あり。一とあり。月。神  
新寺と号。淳和の御宇。天長  
二年。空海和尚。獨り。たふ  
今のち号。改り。其。は。み  
とのり。と。し。て。金剛。定。の。額。と

空海お書ありんと。勅使。を。ま。さ。せ  
ふ。い。る。お。し。も。清。滝。川。水。増。し  
此山の中。さ。歩。り。る。勅。使。を。ま。さ。せ  
川の。わ。り。う。ふ。え。り。の。案。一。額。い  
か。ひ。ら。と。空。海。あ。る。一。り。て。茶  
よ。書。と。ま。さ。せ。お。し。る。額。一  
ひ。り。て。書。り。う。ふ。書。書。の。ゆ  
て。額。面。ふ。た。ら。ま。ら。金。剛。定  
寺。の。四。字。あ。り。の。れ。り。と。ん。今。う。お  
額。書。石。を。て。樓。門。の。お。も。あ。る  
陸。橋。ハ。金。堂。の。良。あり。鐘。の  
深。ハ。菅。原。の。是。皆。卿。席。の。洞。を  
橋。の。廣。相。学。者。な。る。系。敏。約。り  
是。と。世。ハ。三。修。と。号。一。本。朝。の



名意あり。南山楓樹あかきの如き  
紅葉あかばなのほかに秋の紅葉  
強集あつまとくとも北庭院を中  
より注瀨川と見えたりと云  
とす

注瀨川の尾のふちに石あり

○栢尾山西明寺平等心王院

常名を言律本を釋迦佛之像  
其人余の如く人の他用奉弘法大師  
の法王子智泉上人中と云西意律  
師あり

注瀨の栢尾村西の山後あり

○栢尾山あかき山寺 ちのり山石

常名華嚴と云と魚中を釋

如佛坐像三人并あかき以て人の昇巻  
るりあかき山も楓多しあかき

昔の如く注瀨の尾のふち

○光悦寺 あき

常名日蓮と云と本阿弥光悦の  
堂あきあり。て本法皇の末と云

○源光院 あき

常名後正山道白あき源光院の用巻  
たり

たひありあり

○寂光山あき寺あき

常名法華あき檀林あき八ヶ所の長  
一有り日乾上人の昇巻あり

悟号<sup>二</sup>華師<sup>一</sup> 唐<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>奉<sup>ル</sup>リ  
○華師寺 良<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>あり

字<sup>ハ</sup>名<sup>ト</sup>言<sup>ハ</sup>本<sup>ノ</sup>寺<sup>ヲ</sup>瑞<sup>祥</sup>光<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>其<sup>レ</sup>  
と<sup>モ</sup>安<sup>ル</sup>ん<sup>ト</sup>傳<sup>ハ</sup>放<sup>ト</sup>大<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>周<sup>ノ</sup>基<sup>ノ</sup>ふ  
し<sup>テ</sup>い<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>伽<sup>藍</sup>巖<sup>ニ</sup>ま<sup>り</sup>  
し<sup>ッ</sup>今<sup>ハ</sup>八<sup>尾</sup>ち<sup>シ</sup>ぬ<sup>ク</sup>小<sup>寺</sup>と<sup>ス</sup>

○神光院 西<sup>ノ</sup>院<sup>ニ</sup>あり  
字<sup>ハ</sup>名<sup>ト</sup>言<sup>ハ</sup>本<sup>ノ</sup>寺<sup>ヲ</sup>在<sup>リ</sup>深<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>也

弘<sup>法</sup>大<sup>師</sup>并<sup>基</sup>日<sup>大</sup>師<sup>正</sup>二<sup>寺</sup>  
自<sup>化</sup>の<sup>徳</sup>と<sup>安</sup>至<sup>ス</sup>世<sup>ニ</sup>厄<sup>除</sup>  
の<sup>大</sup>師<sup>と</sup>修<sup>ト</sup>礎<sup>礎</sup>全<sup>剎</sup>至<sup>院</sup>  
の<sup>名</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>る</sup>り

○靈源寺 古<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>あり

字<sup>ハ</sup>名<sup>ト</sup>言<sup>ハ</sup>本<sup>ノ</sup>寺<sup>ヲ</sup>釋<sup>迦</sup>仏<sup>日</sup>護  
上人<sup>の</sup>化<sup>後</sup>本<sup>寺</sup>住<sup>持</sup>の<sup>法</sup>親<sup>不</sup>  
して<sup>并</sup>基<sup>以</sup>頂<sup>國</sup>あり

○吉祥山正信寺 古<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>あり  
字<sup>ハ</sup>名<sup>ト</sup>言<sup>ハ</sup>本<sup>ノ</sup>寺<sup>ヲ</sup>釋<sup>尊</sup>望<sup>縁</sup> 圃

基<sup>東</sup>宏<sup>覚</sup>禪<sup>何</sup>妙<sup>師</sup>  
善<sup>宰</sup>釋<sup>何</sup>小<sup>副</sup>住<sup>持</sup>と<sup>高</sup>寺<sup>和</sup>  
堂<sup>宇</sup>寧<sup>の</sup>周<sup>く</sup>ぬ<sup>り</sup>て<sup>法</sup>師<sup>今</sup>  
出<sup>川</sup>邊<sup>あり</sup>寧<sup>何</sup>入<sup>屋</sup>の<sup>好</sup>  
子<sup>子</sup>と<sup>高</sup>者<sup>之</sup>譲<sup>る</sup>定<sup>何</sup>可<sup>化</sup>  
あり<sup>法</sup>を<sup>ぬ</sup>り

○大慈山定峯寺

寺名も言わさるる勅明王の  
聖像めん余世山古昔まじり  
の現しなり吾師く用奉ハ後  
形若又法法もあも此の範  
審法を峰しおひしひし

日新のふみき平興

○大慈山定峯寺

寺名も言本寺千子認る  
あゆみし丹波小属と山城  
属も河代洋守寺の塔も  
あじ古意の流しハ丹波聖回  
即大慈山の流あり信くし

中比和河大峯小毒蛇栖  
修験所の行人跡をその居  
諸山の形若く山とあじびて  
あくよあする世に共一し  
後唐檀の流しハ丹波の流  
今もあゆみし丹波小属と

○杉尾山鞍馬寺

号ハ新寺也

寺名も言本寺は河内天皇  
之像なり余用基澄まわ向  
高らハ延暦十古子大中古  
有伊勢人此人似り御事  
胎也と云くして鶴今を  
知ると云くせんこと常り

形つりあき夜者ふ清水の  
山麓より界る忽ちして白髪  
の老翁ありこれ何ぞいづく此  
山ハ天下之陽也形ハ三指ふ似く  
幸。終さいえん更さらたらびく女むすめは不  
後ご念ねんと建立せむ村むらを空量  
ちしんこぞたまはぬのまをとい  
し小玉城の信濃中なかつの神かみ之  
とまをてまをぬまればもに  
此の山もたまはぬある日之友  
家子けしこ切つる向らふ輪りんと終さいえんふ  
んそ思おもふ中なかつ古ふる唐たう騰たうは南なんの  
舎せ村むら像やう像やうと向らふをせ  
者しん見けんふまあしつりされ八百はちひゃく

異い音おんらり汝に定じやうて着ちやくの地ちと  
まをてししてまををつけて彼かの  
白しろくを殺ころし小其こ玉たま城じやうの  
あまの山やまは延のけり茅ちやうの中なかに  
止とりぬまをうつて此この中なかに  
たまはぬをいふとるんをいふ  
おしもたがまをいふも業わざの中なか  
小昆こ皮ひ門もんのま像やうと地ちたり別  
一いつ中ちゆうといふもて此この像やうと安やすく  
せりこれと報ほうを安やすくせると  
たまをうく思おもひらるる其その夜よの由よし  
り小天童こてんどうまうて曰いは汝にぬつ天  
の像やうとけり又また報ほうせると終さいえんふ  
者しん見けんふまあしつりされ八百はちひゃく

これれも同一神とて名をそそ  
け給ひ今ハ元王として御居の  
あり又一王と名をそそけ給  
るると安室に今ハ西の御居  
これより正月初日小法人系  
御居るに足門天十柱の  
御居をあらたきよ御居を  
賣人らやあらたき御居を  
荒のふるまをりし御居を  
とりて正月御居る人あり

○補陀落寺 口橋校の小寺を指すあり

字もまの言ふまのあり観音  
佛云出寺ハ空也上人に傳へ

は再經をきりて細きと  
地りり言ふ。お中。二三。轉  
本報より死葬の場ありて  
墓中のより建まをりし御  
るり存小小御小所四位あり  
の墓あり

○西念寺 上野原の御居に西側あり

字もまの言ふまのあり  
ある他用春の春菩薩の地  
四ハ御居の御居と名を傳へ  
りしありて御居をみるに  
ハ御居の御居をみるに  
ありけ御居をみるに

しりてそのまの梅とてや  
くもあらず

日本名倉村の山あり

○岩藏山大雲寺

字名も古本も聖観世音  
立像も今も守り基の地用基  
智弁佛心円融位の御願にて  
天禄二年日蓮教忠辨以建  
立あり岩倉と号しとて事六  
桓武天皇世系と草創のころ  
法護のころ王城の四方に  
とてて地を細りたり一ヶ不  
なり今も実相院御門とて  
属と。世傳りて名もきし

法病者地境ふまゝとてこのり  
具繪ありとて

法水情枝あり

○大悲山通寺

字名禪本も聖観も坐像  
三斗斗定朝比高寺初八田光  
院文英尼の宅地なり寺と  
かを所妙心寺龍泉の祖室性  
禪所と用山と守法水尾院  
御五位のりり御所新とて  
たもへり妙心寺と属と

た日あのも御菩薩地

○池花堂

日村人家の間にあり  
本より池花菩薩立像七人斗

小野公皇の化より平相國法皇  
の御ふよりして西まは法作のいふ  
こゝとて六地飛出りのこと也

治承元年の御代

○實相院御門跡

四百十数名身余

御宇名天台御代に檢家方より  
御任職法流園城寺法流義  
ありて三井御門室の一より

治承元年の御代

○松崎山妙泉寺

宇治法華寺の御立本寺に属を  
開基日徳上人當寺初め松崎  
寺と号して山門の別院とあり  
細くふ弘安の法より今の寺と

改む毎年七月十六日の夜に村の  
男女の寺の存よありありあり  
法華題目とて踊るを  
これと題目踊るふ又日夜と  
子炬よりして妙法の二字と題す

口ふあり

○松崎山本願寺

宇治法華寺の中立本寺と  
屬と開基教皇院日蓮上人  
天正二の妙法と題して高野の  
学室とあり今に於て法流  
修成せり法方の学室なる  
ことあり

法中一之部

○上善寺

寺河野口

字名浄土如意院之属也  
阿波尾仏坐像三人余仍基  
の化用基春谷盛信人

○萬松山天寧寺

口下

字名祥用基祥山吉和尙  
莫外天寧寺よりあり

○寶樹山西園寺

字名浄土如意院之属也  
阿波尾仏坐像三人斗惠心の  
化用基賞勝上人

○威王山長福寺

大日下の南

字名四つ子急字泉涌寺より  
属と本寺不動の玉立像一尺  
九寸茶室の御佛あり

○光明寺

大日下修遠橋南

字名浄土百萬遍不属と本  
寺阿波尾仏立像三人余茲  
覺大寺の化用基入寺蓮生  
着中凡抱止しとのふ所抱止  
の如味とけぐくことぞ

○蓮臺山阿波尾寺

大日所



字名淨止如意寺も屬を不  
阿波佐松坐像立人斗はは所の  
此四十八勢巡行乃先十六者  
用是法至工人。鐵田信長を  
害の時不徒幸後をりつと  
後清玉其切おむる骨所を  
あつりゆきふ華をとり信忠  
信忠あるの墓を戦死の百  
二十人の連勝あり

石目所南あり

○華宮山十念寺

字名浄土永観堂も屬を不  
阿波佐松坐像立人守はは所の  
此用基を行人永喜十子七月

二り小室に送命ころても羽  
川あま華ととひさ六法打と  
寺の商路あり。高寺什物の  
中に一休和尚の住自りありて  
佛名軍の圖とつとありは  
地御とむく無比の聖城と  
とせむとと書しとのえ又  
足利將軍家の誌士念佛海の  
石前住あり

ちりふちあり

○佛随寺

字名浄土福林寺も屬を不  
本寺阿波佐松坐像立人守  
あ心他帝王家圖不天曆六

本年二月四日奉准天皇  
御座に於て  
佛陀寺を修飾しむと云々

右の所の南あり

○廣布山本満寺

字名法華岡春日より上人日  
蓮字井一寺の隨一あり

口名廣布御門の南

○光了山本禪寺

字名法華勝勢派本より金銅  
乃釋迦佛立像一人守斗岡基  
日陣上人

日所の南あり

○清淨華院 古より千石

修治の華院より

字名淨土の字の本とれり  
の也  
本堂より左祖法匠工人の坐像と  
安曇と云々守斗阿波尾堂  
本より何法匠佛坐像三人守  
斗あるの他 修りし高僧ありし  
天皇守よりして是等大殿の岡  
基あり初の丸ハ今の上土若所  
鳥丸の西より肉叢道と云々  
よつて肉及切と修せしる夫れ  
山号ち号ありし也中興法匠  
上人より修り世向行上人あり

○廬山天台海寺 古より千石

修治の廬山寺

字名天台密淨律忍学四肖の

本寺より本寺集作佛水像  
之人聖徳太子の浄化世小倉の  
善処と稱し善骨大原の開基  
ありて中興の住心上人ありて  
代人ありてこれハ唐の惠遠法  
師よりとて盧山の二字と書て  
住心和尚と号すまより盧山寺  
と云ふ

口永の南にあり

○遣迎院 寺名不詳

字名台密津律四字と書く  
本寺新造強陸二字佛の立像  
と書きしけり人共より安行保  
の化開基西の人なり

○革堂 日街竹を所引  
一号初願寺 寺名不詳

字名天台本寺より一箇千子鏡  
者立像八人の圓上人の化西國  
第十九番の巡礼所又洛陽の  
銀寺出り第百四番より開基  
の圓上人。革堂といふは圓  
上人常小宮殿といふべき也  
革衣と稱せしむる一人  
之が革上人といふて此号  
ありと云ふ

○本誓寺 寺名不詳

字名一向宗坊より一箇田考修寺

沖門跡に絶所あり本寺何れは  
此寺像を定む守斗あるの地此  
本寺にけり守治末に定む安  
そり此の寺像あり本堂ハ  
吉云小の政所の仁義あり堂  
内西ハ移り永徳の寺用基  
洋々此寺を信正中無り

寺何れに寺下と記

妙塔山妙海寺

字名日蓮持方源あり開基  
日什上人永徳三年二月の建立  
あり。當寺小紀州日言及成寺  
の障あり。由縁ハ其記よりて  
道成寺伽藍圓縁の塔所と

うつ。遂不天正十六年紀分  
新宮の某為寺小寺附此寺  
も僅ありて寺名とて寺と  
らに取小清改んて碑んとす  
小寺附大寺名動して寺あり  
火端切る寺像移りて寺あり  
止て新小一寺と稱たり別け  
堂内小龍むとらん又龍院の處  
不破ありしが此寺小寺と  
ハ平ふりしと記

寺何れに寺下と記

○本山本徳寺 寺名何れ

字名法華持方源開基日隆  
上人宮内中一の建立あり

。織田信長云の塔なきの寺あり

寺何れなるや

○曼荼羅山天性寺

宗曰自法云知恩位所属す本寺  
阿彌陀佛坐像坐人寺主人の儀  
眼譽道三上人の開基なり

口何れなるや

○久田山金剛寺

宗曰法云深林寺所属す本寺  
地藏并立像坐人牛浦米上人の  
他開基同上人当寺ハ和別金剛  
山寺の別座なり

口何れなるや

○本山誓願寺 寺住持古石寺

宗曰法云深林寺所属す本寺あり  
本寺阿彌陀佛坐像坐人佛工  
賢同子茲子園の表也又春日  
明神表あり新向ありて授助  
たす少座小春日の神位なり  
佛面小多字の名号あり天智天皇  
白皇の表なり胎内小五輪六輪と  
造る希代の聖佛ありて寺  
古今小著し本朝ハ天智天皇  
開基ハ惠隱傍那。塔中竹林院  
小少座をその新表ありハ  
の表なりとて世に伝ふ

○誠心院

寺住持古石寺

宗名戒律と言禪法相違字にて  
泉涌寺に所属と云ふ阿保陀仏  
坐像或人其寸斗御堂園白道  
本云の草創ありて和泉或は藤原  
の後世寺小住の寺と云は陰月或は  
此塔ありて傳ふ紅梅の古樹  
あり或はの裁し本云りて世  
新瑞の梅と云ふ

大石の寺

○清帶寺

宗名と云ふ本云り地蔵井水像  
八人年幼基の地古ふ香原を  
和して造るといふ本云り因に  
帯とありたりたり本云り清帶の

地藏と稱して懐妊の婦人安産  
といふ小感應處明なりと云ふ

城入後の西向い

○長今寺

宗名浄土本云り十一面觀世音  
弘法大師の地修ふ一と云ふといふ  
法陽經言巡りの寺一書あり

大石の寺

○西光寺

宗名浄土本云り本属は本云  
業作如未弘法大師の地世の  
業作といふ

寺何坊業作を云ふ

○永福寺

俗号三坊業作

永福寺後門

宗名浄土園福寺小属本尊  
善作仏石像或人年修教土原の地

たひとあり

○大本山系福寺も修てふ系  
宗名浄土浄土流の一本寺あり  
おろす阿比陀佛立像四人斗  
ほおろす人の他用巻あふ人

たひとあり

○本山安養寺

宗名浄土西の流は十八經巡りの  
弟四十六番ありおろす阿比陀佛  
立像五人す春日の神化るり  
此の像女人成佛例蓮華の弥陀  
と極どとてあふ華其心はまの蓮

華と例ふるも初ら道主の口記常  
のどとともふ忽然とて破り  
と度ふ及ぶ相強し七倒蓮華と  
あふ小破りしあふ是列女人胸  
中の蓮華ふ表して女人引接  
の相とあふたふは深  
昔の院の物破りて用巻ハあ心信  
致の妹安養寺あり中興隆佛  
上人あり

ち何語少流左所

○了蓮寺

宗名浄土系慈寺小属は十八  
小經巡の弟四十六番ありおろす  
阿比陀佛立像四人ありあ心

傍初の地世々像面貌相好傍部  
一代制世の内寂勝有り 塔是毎  
臺比形有り 檀上の後の板面小  
二十五菩薩の傍初自画れたり又  
内陣の板壁小浄土九品と画り今  
を 浄く 斑小浄有り内陣四邊  
天井等皆傍初の管化有り 用基  
乘輿月心上人の今のとと此ハ  
十二世信譽了傳上人再建也

○錦凌山金蓮寺 寺何はあはれ ち似廿三石餘余

字名時中本寺阿彌陀佛座像  
字名年用基浄行上人

○十位心院 大百所境内ありあり

字名高言本寺地藏井禪立  
像の余弘法大師の地世々像也  
深敬皇后常小寺信ありて是院  
再建なり なるは 浄及地神と  
称す

寺所正修下ル

○龍池山大雲院

字名高浄王初身位小属と本寺  
阿彌陀佛坐像字名年惠心傍初  
の化用基貞安上人天正の末小  
鐵回信太卿追福のこち寺名云  
の令ありて寺創あり大雲院ハ



信入の法号有り

大石の南隣

○多聞山淨教寺 古の石

字名浄土知恩院（古）と本尊  
阿彌陀佛立像之を春日の神化  
佛檀内外の画圖（古）と心像の筆  
をりて中興立像之人は陽四十八  
教巡りの名号有り也

古何後也

○取王光寺

字名浄土東山一人位不属（古）と  
阿彌陀如来立像之を余は陽  
四十八教巡りの名号有り也  
岡甚良阿上人

大石の南

○法蓮寺

字名浄土知恩院不属と本尊  
系光大師の坐像之を大師  
自化有り岡甚良蓮生也

大石の南

○極樂院空也堂

一号空也寺

字名浄土知恩院不属と本尊  
阿彌陀佛立像之を岡甚良也  
天福三年の御創有り也  
今四天王門  
油の雨（古）法鼓堂あり極樂院  
空也堂と号も岡甚良の岡甚良也  
といふ寺の号空也寺とあり

後れとて号するもの同く人  
建立同くあるもの同く人

○乘願寺 七日ある様

字多摩河一ノ尾と属と曰くハ  
跡巡りのノ尾河ノ者なりを言  
阿彌陀佛立像或人モ寺西佛  
座の他此ノ像露齒見る也  
世小齒佛と称す

日少河河下河下河

○愛山徳心寺

字多摩河一ノ尾と属と曰くハ  
跡巡りのノ尾河ノ者なりを言  
阿彌陀佛立像或人モ寺西佛  
座の他此ノ像露齒見る也  
世小齒佛と称す

此ノ世小衣紋の強尼と称す佛  
初ハ江宗ノ良曲所大膽能治の  
お佛なりれいざう重吾ありて當ら  
うつは園基ノ源和光の齋井と  
氏ノ事線為前平遠仲誠古園文四  
ノ中敷山の宸徒此寺の盛るる  
と略く親密なる人の本廟と破却  
せんとも時不遠伸を京す走向  
忽退散すこつたいさん大ニ忠功とありて  
を付法を蓮如ノ人感有て聖  
徳太子の此他の本佛等子孫より  
他の法者小僧なるもの此寺と  
たすよめて此寺子となり法名乾知  
と改り祀廟と守徳を後也

あつて今の所ありし種正寺と  
改号し古例ふらして寺号ふた谷  
祖廟の古檀人たり又佛舎の前  
小古井あり世々細川の井といふ  
此所より細川藩より寺号をて同  
寺名は中毎夏祭の湯あり井水  
と用ひらるる事なり毎の節令  
平々即入石の信記と傳ふ

はえちを柳と伝ふ

○佛光寺御門跡 山内古石八斗  
山内古石寺と宗本寺の報恩寺  
山内他の坐像と安を以阿比陀を  
本寺阿比陀佛立像三人寺守は  
慈母と山内その他 用奉る報恩寺

古佛之人中興はる源上人の代経  
光之人の二寺前園白の寺橋あり  
して天竺坐主教骨法親王戒作  
とて是より代へ傳ふに伝ふる  
初め興寺と号し後醍醐寺と乃  
御宇古寺の坐像聖佛たりふ  
より奉るののありはとて  
經寺坐像より二寺河東の檀  
主ぬるを徳より福をてとて帝  
廟とては帝ありとていふ  
光の寺とては古寺の坐像聖佛の  
光明より勅使ありとて西に  
奉りてありたり小物より肉表  
ひりてありとて山内古石寺

古寺なりといひて寺と佛を  
とて又とてとてとてとてとて  
重人の信託とてとてとてとて  
たふふとてとてとてとて

○平等寺

号二因幡堂

宇治の言寺勢ハ天台宗蓮院  
門下あり本寺も善作の立像  
古くは善作の立像の上在り  
此寺の像ハ天台宗蓮院の  
内蔵病院の本寺ありて新世  
にづゝ彫刻ありて本寺容あり  
天徳三年同徳園堂の西  
にありて見え國司橋の平卿

漢人小舎して調七あり  
探しりふ光明赫奕と善作  
と安上とありてありとあり  
その他堂と建安寺次は平の國  
司任ゆく由依ありてありとあり  
と信く有丸とありてありとあり  
此寺の像忽然とありてありとあり  
此寺の像忽然とありてありとあり  
佛國小寺ありてありとありとあり  
今之地境是より本寺ハありとあり  
の具光明禪作と寺勢と寺兼  
安元年四月八日とありとありとあり  
とありとありとありとありとあり

堂へ足利義教公の再建あり。又  
園あり。此の園は、（あま）後光寺堂  
彼も小向のれ、（い）巨勢あり。及  
座光寺と号し。いさふ好すと

（あ）修徳西あり

○新吾寺

（あ）一号、津新堂

室名時宗天皇年中、權林皇  
后の建立あり。園基へ弘法大師あり  
中具王阿上人宗風と改らる。なる  
阿波尾佛立像、（あ）平安阿波尾  
初の本寺へ信あり。吾寺の如來と  
極形して、（あ）なる。なる。なる。  
あり。なる。なる。なる。なる。  
不安あり。河新寺と号し。又この  
坊中、小扇と折て、（あ）なる。なる。  
なる。なる。なる。なる。なる。  
なり。なる。なる。なる。なる。

○佛性山本覚寺

（あ）下、何なる。なる。  
なる。なる。なる。

室名、（あ）浄土。思屋。小属。本尊  
阿波尾佛立像。人、平安阿波尾  
像と世、（あ）如法佛と号ど。其、（あ）佛工  
安阿波尾造立の時、（あ）清園の二室、（あ）入木漆  
ホ、（あ）く。精密と号し。なる。なる。なる。  
信齋戒、（あ）相好衣裳。信解あり  
て、（あ）仰も。なる。なる。なる。なる。  
園基、（あ）なる。なる。

○壇電山上德寺 このふの西向

宇治寺の息院に属する本寺の阿彌陀  
佛の唐化圓基に依りて人

○白毫寺速成院 七百五十五  
寺の石の寺

宇治寺の西大寺に属するその  
聖徳太子の立像南雲佛の像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に

○新吉寺 七百五十五  
寺の石の寺

宇治寺の息院に属する本寺の阿  
彌陀佛の立像に依りて寺の立像  
に依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に

○負羽山蓮光寺

宇治寺の息院に属する本寺の阿彌陀  
佛の立像に依りて寺の立像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に  
依りて寺の立像に依りて寺  
の立像に依りて寺の立像に

の傍に坐す所法宗の像と銘に成不  
成然と被居の像と銘して其國より  
さうり付ありしに像番試みんと  
甚可と今一夜ゆきんとて遊あそむ  
終ふ山科の郷とて遊附けんと行  
つてこの傍かひと被居ひが遊附あそけり  
此小作を再び首と上れはる新あらた  
して二種とて人々其の思ひと  
ありとを西よりありとを北今ふ  
山科小原とありとありありあり  
ありありありありありありあり  
信しん登とう上人あり。又當あたり法堂  
入と馬止地うまどあり

○長講堂

字あり津土西山源本より行弥陀佛  
坐像を人年ある心傍於此後白行  
法皇の法皇創法華講備念以三昧  
の四地法華坐像念佛三昧寺と号

○市中山金光寺

字あり時宗本より行弥陀佛坐像  
定より定細地園基堂也上人兼平  
年中のとき創より住古此地市場  
たふふより市包を傷とあり

○延壽寺

字あり津土西山元明寺屬なる

三つ佛中央大日小釈迦南法苑  
初坐像今平運度世多病を  
とつて勝造と文治元年

後白河帝御建立蓮華玉座の  
再興今宗實之寺上人中興之

多食通之寺下

○大平山宗他寺

字名禪本寺釈迦佛開基  
天仁和尚寛西年中多劫所代  
多劫入普賢後寺之入建立誠寺  
永平寺の寺あり

東六條

○本願寺御門跡

此寺名清寺宗本山岡基親寺

聖人あり慶長七年十一世顯如  
上人の嫡子教如上人開基の

台命と云り六町四方の境地と稱  
此地を以て新小沙建立ありて親原

より寺代と血脈を継承する本堂  
本寺阿弥陀佛立像と云人云阿彌陀

佛今と帝釋地と帝宸等と牌と  
安座次清彩堂祖傳中自化の

本像と安座此像より上あり  
福妙寺ありと云 台命よりて

高田小よりと云 経小あり又  
松穀御殿の 台徳院殿を命て

又小浄化を稱り高田列殿と云  
此地より 融天臣の四波ありと云



石川史山 少録まのり 石川史山補遺  
として口付の風を化して類を  
と此の経路をたもみ神君を無敵候  
と今言造言より其後長壽は此のし

○荻堂山金光寺 七条五河原  
一早の寺多々あり又此の寺

少名竹系相分り其後法隆寺  
寺も小属と本尊阿弥陀佛  
立像一人を八寸とあり同基地付  
上人の代りとして所定之類が宅あり

○城奥寺 石川史山の南  
寺の多々あり

少名竹系相分り其後法隆寺  
寺も小属と本尊阿弥陀佛  
立像一人を八寸とあり同基地付  
上人の代りとして所定之類が宅あり

其昔は土師の地ありて法隆寺  
巡りの寺とありて寺あり九條寺  
古伝信長公の殿館の地あり  
永らく寺の中は修成下忠通公雲  
多ありて改て寺とありて寺  
又信長公と城奥寺とありて  
とあり

大宮山公の南に於て中三河  
○八幡山教王護國寺秘藏傳法院

後三東寺又左寺とも号す  
少名竹系相分り其後法隆寺  
寺も小属と本尊阿弥陀佛  
立像一人を八寸とあり同基地付  
上人の代りとして所定之類が宅あり

大原よりりり此代ハ大内裏の所  
の臚館しやうりかん不して吳國ごこく人來朝の所  
管魚あひらの所より漢土かんちの臚館しやうりかん  
不宣三藏ふせんさんざう不しなるりて精舎しやうしや也  
管いん一いん例れい不し準じゆん一いん弘仁四年  
左寺さうじと宣海せんかい不しなるり右寺  
と守教しゆきやう不し編へん不し後ご大内建  
立たてなるり一いんとるり。金堂の  
翼よく小五重の塔あり四方四  
と安やすふとるり廿九間横印  
ある四面しやうめん長三年初はつしに修しゆ  
建たてなるり

○万祥山大通寺通也必院  
格号かくごう尼寺にじ

字名論じやうなごん言律ごんりつ意字ごんじ本名  
阿羅陀佛聖像あらかたぶつせいざう之これ人宣ごん宣ごん宣ごん宣ごん宣ごん宣ごん  
此他これありと宣ごん王おう經きやう基き之これの必かならず舎しや  
ありと天徳てんとく之これ中ちゆう興きやう之これの塔  
靈廟りやうびやうと建たて之これ法ほふ源げん念ねん右みぎ大臣だいじん  
宣ごん胡こ之これの法ほふ室しつ之これ位ゐ位ゐ尼に大だい體たい  
然しかとるり言ごん律りつ作さくとるり  
尼にとるりたふふ不し尼に寺じとるり  
古こ孫そん聖せい像ざう之これと六む神しん社しゃの於お於お邊へ

○塩通寺しちゆうじ 西七にしちの南のみなみあり  
号ごうニ水すい葉えふ作さく  
字じ名な中ちゆう之これ言ごん律りつ意ごん字じ本ほん名な  
立た像ざう之これ人ごん宣ごん宣ごん宣ごん宣ごん宣ごん宣ごん  
心しん現げんのごん宣ごん像ざう之これハ水すい葉えふ作さくと

好むも又堂の傍小池あり  
これよりして名つらふもさあ  
浦のほろひ平相坐慈母れ  
とたほて印やせしごとく申魚の  
泉有りあり

○禮現寺 口所多不をあり

宗名浄土教母屋を属と本号  
阿弥陀仏坐像あり他

西宮名谷川沙原百字云

○興正寺 行門跡

浄土名浄土を宗本号阿弥  
陀佛立像あり余女阿弥他  
檀なき方、祖作親有聖人の

畫影と安んじと南山初め科の  
卿中ありを後記くまうつ  
永流と二子門の号と執持あり  
まうたの世ありははれり

たの所あり

○常樂寺 寺常樂寺

宗名浄土を宗本西本願寺属  
本号阿弥陀佛立像あり余春日  
の作あり因基有骨上人堂あり  
の坊ありあり初らた高を  
ありあり後法よた谷の  
うつこれ寺ありと号して  
九年の地あり

○本願寺御門跡

西六條

所存三石余

山崎の古刹を以て山崎本願寺  
親皇太子太子山崎本願寺  
陀佛三像を以て余安行法の化  
用山崎親皇太子自化の三彩坐  
像即ち太子余安行法太子の甚  
女堂に信危一授女せしむる如く  
聖人化の法蓮骨と細掛し  
漆少和し一恒をせり故に骨肉  
の形を以て。此聖國のまろまろ  
の山崎親皇太子ありしと  
るふらうされしと也國と東中  
の山崎又山崎太子山崎のり

古法眼元信の尊なり國下龍賢  
國との山崎の古刹を以て太子  
形と信危一授女せしむる如く  
法殿の法蓮骨蓮毫の及也太子  
信と求りて信を以て

万壽寺西門尾角

○大泉寺

宇治の古刹を以て大泉寺と名す  
阿彌陀佛三像を以て太子信危の  
今山崎親皇太子の化國を以て  
山崎親皇太子信危太子信危七  
の二月十五日の夜本寺を以て太子  
要とて其告ありて其無事と  
其太子信危一太子信危太子

より右のそと像と花障のめま  
ねしきと花障のそとと又如來  
の右の正袖服せしきと正引袴の  
相と袴しきと正袖の中と  
折より又花障のそとと花園の  
四花ふしと正引袴のそとと  
の別紙より花園のそとと  
聖人正引袴の所と正引袴  
ありて妙妙と正引袴しきと  
しきと正引袴しきと

堀川松原の南  
○大光山本國寺妙法華院 古所  
字名日蓮本山開基日蓮上人初八  
相州鎌倉松原谷ありては

堂よりと文永十の八月廿日  
揚子日朗正所屬と申す如來正  
小周郎と申す又日印もあつた  
住し日靜の所勅給ふと成りし和  
元年元明寺勅ありては地  
橋しと申す本堂中央法華經  
日助傳の一字これの自筆た  
新迎右多室坐像三人余服正  
中と四菩薩立像三人余共ふ  
民部正法下定慶の住持正法  
日蓮上人の親と妻とと日靜  
上人の像とと相存生の經卷  
と申すとねむしと又高寺と小  
高寺を佛ありて昔上人伊反

祐親入を多額不入をいしむる  
存<sup>ハセ</sup>於<sup>ウケ</sup>よ与<sup>ル</sup>しむるをいしむる傳元  
所中出現の夫は作て南の寺の  
付<sup>ケ</sup>るなり

相多ふところの如

○長園寺

宇少の傳も百万通に属と平なる  
阿波尾佛立像も年々是貴なる所  
乃他国基法嚴和の慶も千三年  
の草創なり

口所の如

○中堂寺

宇少の傳も西の派古ハ千名余あり  
して是貴なる所の國基なりなる

阿波尾佛立像も千名是貴なる所  
初ハ殿山中堂少ありしなる所  
傳りなり

作るるを御金屋千

○歸命院

宇少の傳も千名是貴なる所  
阿波尾佛立像も千名是貴なる所  
慶も千名中堂少ありしなる所  
の業も千名是貴なる所

○月輪寺

左の如の如

宇少の傳も千名是貴なる所  
月輪殿も千名是貴なる所  
寺も千名是貴なる所

りて年々益々人の化へ中興の昭條  
和るなり

修へて通多ふ不東

○寶勝寺地蔵院 ちん 正徳三年

修へて通多ふ不東

ウチヨミと言律ありて和あ拓拓<sup>せうせう</sup>と  
屬と本より地藏菩薩聖像<sup>せうざう</sup>定  
斗定初の地より<sup>せうざう</sup>を創ハ一<sup>せうざう</sup>を後  
の<sup>せうざう</sup>中<sup>せうざう</sup>正徳三年ありて用巻ハ  
快<sup>せうざう</sup>原大<sup>せうざう</sup>修<sup>せうざう</sup>あり中<sup>せうざう</sup>共<sup>せうざう</sup>國<sup>せうざう</sup>を  
人<sup>せうざう</sup>毎<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>月<sup>せうざう</sup>十<sup>せうざう</sup>日<sup>せうざう</sup>あり<sup>せうざう</sup>其<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>事<sup>せうざう</sup>  
大<sup>せうざう</sup>多<sup>せうざう</sup>佛<sup>せうざう</sup>祖<sup>せうざう</sup>あり<sup>せうざう</sup>て<sup>せうざう</sup>極<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>積<sup>せうざう</sup>聚<sup>せうざう</sup>  
なり<sup>せうざう</sup>は<sup>せうざう</sup>是<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>至<sup>せうざう</sup>生<sup>せうざう</sup>和<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>なり

修へて通多ふ不東

○聖徳寺

ウチヨミ言律ありて和あ拓拓<sup>せうせう</sup>と  
阿<sup>せうざう</sup>比<sup>せうざう</sup>陀<sup>せうざう</sup>三<sup>せうざう</sup>尊<sup>せうざう</sup>像<sup>せうざう</sup>あり<sup>せうざう</sup>て<sup>せうざう</sup>極<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>積<sup>せうざう</sup>聚<sup>せうざう</sup>  
なり<sup>せうざう</sup>は<sup>せうざう</sup>是<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>至<sup>せうざう</sup>生<sup>せうざう</sup>和<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>なり  
の<sup>せうざう</sup>時<sup>せうざう</sup>旅<sup>せうざう</sup>館<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>地<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>至<sup>せうざう</sup>生<sup>せうざう</sup>和<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>なり  
寺<sup>せうざう</sup>と<sup>せうざう</sup>云<sup>せうざう</sup>り<sup>せうざう</sup>四<sup>せうざう</sup>十<sup>せうざう</sup>八<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>年<sup>せうざう</sup>也

○教皇山又在寺

修へて通多ふ不東

修へて通多ふ不東

ウチヨミ言律ありて和あ拓拓<sup>せうせう</sup>と  
余<sup>せうざう</sup>春<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>日<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>化<sup>せうざう</sup>へ<sup>せうざう</sup>極<sup>せうざう</sup>武<sup>せうざう</sup>帝<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>勅<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>不<sup>せうざう</sup>  
列<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>帝<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>系<sup>せうざう</sup>創<sup>せうざう</sup>あり<sup>せうざう</sup>て<sup>せうざう</sup>同<sup>せうざう</sup>家<sup>せうざう</sup>性<sup>せうざう</sup>後<sup>せうざう</sup>  
の<sup>せうざう</sup>所<sup>せうざう</sup>あり<sup>せうざう</sup>又<sup>せうざう</sup>中<sup>せうざう</sup>將<sup>せうざう</sup>定<sup>せうざう</sup>方<sup>せうざう</sup>部<sup>せうざう</sup>ト  
勅<sup>せうざう</sup>を<sup>せうざう</sup>り<sup>せうざう</sup>て<sup>せうざう</sup>分<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>た<sup>せうざう</sup>り<sup>せうざう</sup>昔<sup>せうざう</sup>書<sup>せうざう</sup>不<sup>せうざう</sup>  
と<sup>せうざう</sup>の<sup>せうざう</sup>む<sup>せうざう</sup>き<sup>せうざう</sup>行<sup>せうざう</sup>あり<sup>せうざう</sup>て<sup>せうざう</sup>年<sup>せうざう</sup>と<sup>せうざう</sup>その

又れい権ごんをらつく此こ寺じの敷り揚  
とらふととと恒こ信しんの報答こたへもあらう  
ゆて此こ寺じもあらうとりし

○休務寺

治少後三つ西

字多由云西山池本寺阿修羅  
立像之人の身年八情宮の神化  
園基貢空量林上人寛永十年の  
多割四十八形出りて之著り

坊寺の油少後西

○紫雲山極樂院えん極樂寺

俗号三喜也堂

字多由云新野院も属とて其基  
宮也上人天福寺の多割四り  
おら行法住公立像之人又上人

自他の青像と安きと押上人ハ  
延喜寺才一の宮子なりし鹿  
卯の子もおのたのしの山も形し  
く今ぬま標とともを鞍馬の奥ふ  
ら法也のふ麻ああくまてと人と  
磨らるふ上人とれとあれとを聲り  
とやうらうとと深一夜麻あらう  
どまらうらふ平の定盛遊福しと麻  
と持来りまの山とて行れしゆと  
からり上人夫きあ慈傷してま麻と  
乞ひて皮と求む一角と村のに  
不付て帝と推からふ從之盛  
上人の法使ふゆへしゆ子とらり  
老あらうとあらうと具すし



有<sup>う</sup>岐<sup>ぎ</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>者<sup>しや</sup>一<sup>い</sup>跡<sup>せき</sup>を<sup>た</sup>敷<sup>き</sup>  
て<sup>て</sup>人<sup>ひと</sup>心<sup>こころ</sup>他<sup>た</sup>の<sup>た</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>市<sup>いち</sup>中<sup>ちゆう</sup>と<sup>と</sup>仁<sup>にん</sup>尊<sup>そん</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>音<sup>おん</sup>高<sup>かう</sup>  
跡<sup>せき</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>ち<sup>ち</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>住<sup>すま</sup>い<sup>い</sup>神<sup>かみ</sup>印<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>

治少治新何の由

○龜龍院 修<sup>しゆ</sup>多<sup>た</sup>海<sup>かい</sup>寺<sup>じ</sup>作<sup>さく</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>

ウ<sup>ウ</sup>少<sup>少</sup>多<sup>多</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>陸<sup>りく</sup>心<sup>しん</sup>度<sup>た</sup>少<sup>少</sup>属<sup>じゆく</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>  
を<sup>を</sup>厚<sup>こう</sup>明<sup>めい</sup>王<sup>おう</sup>坐<sup>ざ</sup>像<sup>ざう</sup>一<sup>い</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>斗<sup>と</sup>法<sup>ほふ</sup>法<sup>ほふ</sup>  
大<sup>だい</sup>師<sup>し</sup>の<sup>の</sup>母<sup>ぼ</sup>龜<sup>き</sup>龍<sup>りゆう</sup>寺<sup>じ</sup>全<sup>ぜん</sup>洞<sup>どう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>  
龜<sup>き</sup>甲<sup>かう</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>り<sup>り</sup>古<sup>こ</sup>浦<sup>ほら</sup>島<sup>しま</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>勸<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>  
一<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>初<sup>しよ</sup>信<sup>しん</sup>わ<sup>わ</sup>市<sup>いち</sup>出<sup>しゅつ</sup>れ<sup>れ</sup>  
弘<sup>こう</sup>信<sup>しん</sup>大<sup>だい</sup>師<sup>し</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>創<sup>そう</sup>也<sup>や</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>

仁の寺坊の古の由

○仁の寺

ウ<sup>ウ</sup>少<sup>少</sup>多<sup>多</sup>治<sup>ち</sup>意<sup>い</sup>谷<sup>こ</sup>少<sup>少</sup>属<sup>じゆく</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>永<sup>えい</sup>十<sup>じゆ</sup>十<sup>じゆ</sup>年<sup>ねん</sup>  
の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>創<sup>そう</sup>り<sup>り</sup>本<sup>ほん</sup>寺<sup>じ</sup>阿<sup>あ</sup>比<sup>ひ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>園<sup>えん</sup>基<sup>き</sup>の<sup>の</sup>  
住<sup>すま</sup>い<sup>い</sup>人<sup>ひと</sup>。境<sup>さかい</sup>内<sup>うち</sup>少<sup>少</sup>部<sup>ぶ</sup>を<sup>を</sup>修<sup>しゆ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>  
本<sup>ほん</sup>尊<sup>そん</sup>十<sup>じゆ</sup>面<sup>めん</sup>部<sup>ぶ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>合<sup>あ</sup>寺<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>本<sup>ほん</sup>  
と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>向<sup>むか</sup>本<sup>ほん</sup>同<sup>どう</sup>他<sup>た</sup>之<sup>し</sup>法<sup>ほふ</sup>師<sup>し</sup>を<sup>を</sup>述<sup>しよ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>  
才<sup>さい</sup>在<sup>ざい</sup>六<sup>ろく</sup>者<sup>しや</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>

仁の寺を治意谷の西

○仁の寺

海<sup>かい</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>る<sup>る</sup>者<sup>しや</sup>を<sup>を</sup>通<sup>つう</sup>不<sup>ふ</sup>属<sup>じゆく</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>明<sup>めい</sup>寺<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>  
の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>建<sup>けん</sup>立<sup>りつ</sup>本<sup>ほん</sup>寺<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>阿<sup>あ</sup>比<sup>ひ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>法<sup>ほふ</sup>師<sup>し</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>  
と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>他<sup>た</sup>佛<sup>ぶつ</sup>至<sup>し</sup>三<sup>さん</sup>佛<sup>ぶつ</sup>阿<sup>あ</sup>比<sup>ひ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>法<sup>ほふ</sup>師<sup>し</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>也<sup>や</sup>

中他寺を治意谷の西

○神泉苑護國寺 古<sup>こ</sup>跡<sup>せき</sup>在<sup>ざい</sup>石<sup>せき</sup>

中<sup>ちゆう</sup>少<sup>少</sup>多<sup>多</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>東<sup>とう</sup>寺<sup>じ</sup>法<sup>ほふ</sup>善<sup>ぜん</sup>院<sup>いん</sup>属<sup>じゆく</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>す<sup>す</sup>

昔安龍王の社を他の中居りあり  
三重の宮より大日如命と云ふ事  
池を法成池と云ひて内表  
の河野地廣大なりて天子<sup>ゆきえん</sup>後漢の  
地有りたり六巨勢の金園石と  
云て風光と神人<sup>しゆじん</sup>奇観<sup>きかん</sup>法苑と  
記して親命<sup>おきな</sup>ふ入と弘法<sup>こうぼう</sup>天竺<sup>てんじく</sup>の  
善女<sup>ぜんにょ</sup>龍王と清<sup>きよ</sup>天下  
早魁<sup>さうがい</sup>の慈<sup>あわれみ</sup>となめて敷感<sup>しきかん</sup>を  
とあり少小町<sup>せうせうまち</sup>を子と縁<sup>ゆかり</sup>と  
雨と降<sup>ふり</sup>し踏<sup>ふみ</sup>ハ宣<sup>のたま</sup>るとうけて  
官人<sup>くわんにん</sup>と捕<sup>とら</sup>し心<sup>こころ</sup>帝<sup>みかど</sup>伊感<sup>いかん</sup>の余<sup>あま</sup>り  
み位<sup>みゐ</sup>を帰<sup>かへ</sup>りしもけあなり又  
白<sup>しろ</sup>河<sup>が</sup>屋<sup>や</sup>けねの厨<sup>く</sup>物<sup>ぶつ</sup>とつと

ありし赤<sup>あか</sup>池<sup>いけ</sup>中<sup>なか</sup>より令<sup>たま</sup>度<sup>たご</sup>福<sup>ふく</sup>  
老<sup>らう</sup>方<sup>ほう</sup>とらして上<sup>かみ</sup>りたれ池<sup>いけ</sup>と物  
の丸<sup>まる</sup>とらふ事<sup>こと</sup>池<sup>いけ</sup>深<sup>ふか</sup>く入り古<sup>ふる</sup>原<sup>はら</sup>  
判官<sup>はんくわん</sup>お美<sup>み</sup>にけねを帰<sup>かへ</sup>り又弘<sup>こう</sup>仁<sup>にん</sup>  
と年<sup>とし</sup>小<sup>せう</sup>信<sup>しん</sup>縁<sup>ゆかり</sup>帝<sup>みかど</sup>の慈<sup>あわれみ</sup>かひく  
花<sup>はな</sup>の<sup>いろは</sup>と信<sup>しん</sup>とらふ事<sup>こと</sup>池<sup>いけ</sup>深<sup>ふか</sup>く入り古<sup>ふる</sup>原<sup>はら</sup>  
建<sup>た</sup>保<sup>へ</sup>の<sup>いろは</sup>と信<sup>しん</sup>とらふ事<sup>こと</sup>池<sup>いけ</sup>深<sup>ふか</sup>く入り古<sup>ふる</sup>原<sup>はら</sup>  
うりしとえねの<sup>いろは</sup>と信<sup>しん</sup>とらふ事<sup>こと</sup>池<sup>いけ</sup>深<sup>ふか</sup>く入り古<sup>ふる</sup>原<sup>はら</sup>  
とらふ人<sup>ひと</sup>官<sup>くわん</sup>ふ<sup>か</sup>まりしと再<sup>また</sup>具<sup>ぐ</sup>  
ま<sup>ま</sup>言<sup>こと</sup>の<sup>いろは</sup>と信<sup>しん</sup>とらふ事<sup>こと</sup>池<sup>いけ</sup>深<sup>ふか</sup>く入り古<sup>ふる</sup>原<sup>はら</sup>

○順<sup>のり</sup>真<sup>まこと</sup>寺<sup>てら</sup> 丸<sup>まる</sup>を<sup>を</sup>所<sup>ところ</sup>河<sup>が</sup>川<sup>がわ</sup>の<sup>の</sup>西<sup>にし</sup>

京<sup>きやう</sup>野<sup>の</sup>津<sup>つ</sup>打<sup>うち</sup>卷<sup>まき</sup>六<sup>むく</sup>  
百<sup>ひゃく</sup>九<sup>じゅう</sup>

春日比國其六本朝より八世迄如  
工人の長子七男實後之人とある  
行彼れの名号とあり是は天正  
寺中織田信忠と云ふ所あり今  
跡を以て形後之人格の橋岸の  
大ねりし軍勢を老急なる  
ときふ味方の中より一士を以て  
形後を助け身代り成て付た  
上人何士と云ふは形後の思ひ  
より神中に入まると云ふ人の  
その名字名号と自らに云に  
初れより行されハ敵のあり  
ありと行され高寺不現とて  
付るとあり

下立賣七本松の西

○浄篤院

宗名浄土浄子院少属本寺  
阿彌陀佛立像を人守持り  
漁義經念持佛なりと云ふハ  
巡りの中三番也開卷ハ心巻  
上人天正四年中の建立あり

○西蓮寺

口所

宗名浄土浄子院少属本寺  
阿彌陀佛立像の他又寺内に  
観音坐ありなる十一面観音  
立像も年々の古佛者相座  
の心巻とて今も賣持あり

はるうとを記す遊りやたはる  
より用基の西登之明層三〇の  
建をたり

あまを信ふ水の由

○松林寺

宗名は云々合ふ属を本寺  
阿波尾伝立像之人并古蓮座を子  
の地用基法印上人天正二年中の  
多刹あり又當寺有るより種  
合教をせし世宗法日御家  
寺附ありと云々又元は信り人  
為母を痛の時祈願ありし  
下りる者中より遊りわのり  
よ

七和色水

○観音寺

宗名は云々通子属は本寺  
阿波尾傳立像之人寺慈母宮の  
の地用基方松林上人慶長二  
年の建之又境内観音堂あり  
本寺立像を一人寺と云々安阿波  
の地應永年中渡海りのとれ  
山名重氏世記より祈願諸  
人を脚く記す遊りの身廿七番

水 七和色水

○福寿山慈眼寺

宗名は云々名台を万和寺属  
本傳重記より立像一人と云り

延徳の能治寺清水の本宮は月本  
日竹の地へ岡山ハ大寺ニ水徳和尙之  
御田信之の傳又伝ニ本陸奥ニ成政  
の本刹として建立レ

出水通少平の西  
五所石

○福勝寺

字名云言少聖法ノ後ノ属ハ  
本宮石動明王業師ハ二神ニ  
安立ハ其ノ弘法ノ所ノ也

西ノ土ノ立常ノ下

○華岡院

字名浄云浄善ノ後ノ属ハ本  
宮阿彌陀佛坐像モ其人寺法系  
其如堂本宮と目本宮ノ為信ハ

元天宮字ありて園基海山寺の  
皇子四ノ兵部卿守良親王御家  
たより法蓮和也ノ身一別妻居尾  
武近の宮と寺とありぬハ之後法安  
十年聖徳王の浄善傍流賢才と  
才の阿天宮と云浄善と入言水の  
流と礼阿上人と云阿阿及法西  
只代の法孫也後の二世と嗣又  
浄善ノ後と云。元亨の以信塔  
寺自修ノ身と云浄善ノ廟也後の  
本宮の示現をともあり是日之屋  
ノ如智と云浄善一高麗の檀越  
ともありて浄善ノ身ノ如の寺也  
と云ありと云

○釋尊寺

ゆゑに寺なり

字多治寺禪林光明寺の  
あしと屬とわさる阿比陀佛  
主像のく平之を曆年同く  
修鳳をある用巻と

○國生寺

口の寺なり

字多治寺通各々屬はを阿比  
陀佛之像はく平之を曆年の他  
ま如量乃平之と自來ることを  
又口のあを子堂あり聖徳太子  
の自他のも像とを寺とせり  
係のる寺父用明帝伊能の

出付の寺といのちのいし相  
あして考まの寺なり

西の系はか通

○東光寺

下の系はか通

字多治寺知息院の屬す本尊  
阿比陀佛主像と人守り安阿比  
の他山像の普賢のあまねか  
はるまの海像とを寺とせり  
たすたすた死必死の寺と入  
たすたすた佛し宝鏡持村  
佛の寺と

○法華寺

右の寺なり

字多治寺一神が地を門とす

属と云ふ所の以て其の真際のため  
 日像上人一七の同法法あるを  
 古今に記述するなりとてわづら  
 ざるに経典のそのの古言を大まか  
 かに記述ししが其のそのやて法  
 經のそのなり極なりといはれらる  
 なるそのゆへに日像のそのなり  
 たるその大なる其のそのなりなる  
 たるその法にそのなりとて其のその  
 なるそのそのなりなるそのそのなり  
 なるそのそのなりなるそのそのなり  
 なるそのそのなりなるそのそのなり

○龍園寺

大町の南に在り

寺あり浄土西方の属に在り

阿彌陀佛之像を平徳の他  
 又小堂に観音地藏とありて去  
 り一徳の化せたるハ元江の田  
 山の所にてあり信をせり  
 其堂塔を其の所にてあり  
 其徳のそのなりなるそのそのなり  
 其徳のそのなりなるそのそのなり  
 其徳のそのなりなるそのそのなり  
 其徳のそのなりなるそのそのなり  
 其徳のそのなりなるそのそのなり  
 其徳のそのなりなるそのそのなり

大町所あり

○善門寺

信三映山に在り

寺あり其のそのなりなるそのそのなり

一ノノ寺に梅檀ありて白く鶏  
摩の化育の招致の因を證す  
之ノ高きより將本の室を傳つ  
る寺に中ノ小映山に碑石を  
多く栽ちておのふなり

内り

○具足山寺

字名日蓮後円教院の御宇  
建基同日係上人所創也是寺  
の寺は修ふ山寺自ら是を修ふ  
らる具足といふ

一寺の西に在り

○獅子乳の轉法輪寺

字名日蓮後円教院の御宇  
建基同日係上人所創也是寺  
の寺は修ふ山寺自ら是を修ふ  
らる具足といふ

一丈四寸余室唐四年梅河の院の  
御宇勅命よりて唐河内國通  
上人建ちたり

大日所

○清和院

字名日蓮後円教院の御宇  
建基同日係上人所創也是寺  
の寺は修ふ山寺自ら是を修ふ  
らる具足といふ

○寶樹寺

字名日蓮後円教院の御宇  
建基同日係上人所創也是寺  
の寺は修ふ山寺自ら是を修ふ  
らる具足といふ



○初光院古傳寺

少許の整理

宗名を言ふ言ふ山と屬とわす  
宗師は教王院の住持也

○西の方寺

七日

宗名天台地不別都屬也  
阿比陀佛の教を傳也

西の宗名通之也

○大聖山西光院

宗名法王律也阿比陀佛の教  
上人金剛國基也徳久人徳久  
陽明家の臣之延室二〇官と稱し  
也宗師は法王と云ふ也  
と宗師と云ふ也

の比大佛殿の洞窟と本佛殿なり

と比は像の教指形情流也

寺と云ふとそは法王と云ふ也

比西光院の法王と云ふ也

中今今の教指形と云ふ也

五人所これと云ふ也

好國師の法王と云ふ也

二月廿二日

ありも言我寺所ありて

あり又西光院好寺と云ふ也

あり西光院好寺と云ふ也

あり西光院好寺と云ふ也

あり西光院好寺と云ふ也

あり西光院好寺と云ふ也

あり西光院好寺と云ふ也

冷泉の付たる寺縁起多人履  
の申候本具の記ありて一冊と  
しつる信のりあり

しらべの文

○香林山一四節寺

ウチも一寺ありて竹田庵佛坐像  
三人守あるの他因基ハ人住跡  
あり人ありて寛文五年の甲子刻  
あり寺毎朝水施能施あり用山  
より今も高橋あり

淨徳寺の地所

○安徳山大龍寺

ウチも浄土寺ありて浄土寺  
阿彌陀佛坐像ありて安徳山

此寺像佛ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて  
浄土寺ありて浄土寺ありて

浄土寺ありて浄土寺ありて

○安徳山淨徳寺

ウチも浄土寺ありて浄土寺ありて  
阿彌陀佛坐像ありて浄土寺ありて  
用基ハ浄土社淨土寺ありて

浄土寺ありて浄土寺ありて

○浄土寺

ウチも浄土寺ありて浄土寺ありて  
三寺ありて浄土寺ありて

如二國作あり

○忍光寺 作福寺を二宗の小

ウヤ名日蓮本國より小属園基の  
日安上人が歿し是れ其廟之の家  
は此寺式に於て其の後に其室女  
尼より追福のため建立せられた

○無量寺 あかの小栢町

ウヤ寺は古くは院小属の寺  
阿比佐佛之像は其人善なる化之  
り人形遊りの寺とあり

○龍院 寺領五百石

ウヤ寺名は舟形院の園中より云  
乃母之瑞龍院尼云の寺とあり  
云の後尼よりして住持なり  
中はより二寺ありは是れ女住し  
かゝりては持家の中身あり  
なり

○般舟三昧院 寺領五百石

ウヤ寺天台宗の律宗の寺なり  
その阿比佐佛坐像は其年 慈覺  
大原の住用基 貞篤上人 正徳  
号し 圓慈和名を信じて其後  
内々賜りて 帝王清代のもの  
牌をぬき

寺領五百石

○北向山欽定寺 上三寺をのめ

高僧を云言本寺欽定を立像  
千人等法法大師の化則大師の  
國基所て修徳帝の勅所下く

少僧社をまつをまわす

○金山天王寺

寺多を云言本寺天王を立像  
千人の化則 報多師のそ一く

あはれあのか

○瑞應山大藏院寺 うんじや

信号ニ新也堂

寺多を云言本寺瑞應を立像  
千人の化則 報多師のそ一く  
用明を皇師於中興用山本法

義堂上人貞應年中の丹峯く

かむをひりて

○空隆山石像寺

寺多を云言本寺空隆を立像  
千人の化則 報多師のそ一く  
阿彌陀佛立像ニ云つて寺多を  
の化則又寺多を立石彫の地蔵  
千人あり立像千人中法法を  
の化則寺像をひりて寺多を

あまを虎みだのふ

○あまを虎みだのふ

寺多を云言本寺あまを虎みだのふ

あまを虎みだのふ

○松倉寺

寺多を云言本寺松倉を立像

あまを虎みだのふ

阿比良佛立像云々寺斗あふ  
の付爾春梅念上人曰く此像の  
身十善あり

あふをたか

○名羽山門持寺るはを平

又号大光山教院又信願摩き

中よりふとふとろ縮く五聖像出  
く人定朝の他は像たの内、加彩物  
願ぬ佛所家定朝化又言くて  
定朝重テ如彩ト書ス一か多良の修云  
直法修をたふふ人罪をの初く  
方又をふ小様積あり毎春を院  
校を治く代ハ然ス多之科をたふふ  
これをきまつて十日念佛今の  
法科とすといふ

○金宝山上品蓮華寺ちんねん

院号九条三條院又香隆といふ

字多羅古なる釈迦仏大徳國師  
とて人言ふ斗重蓮をよの山化云々  
法を重修しといふなり

今官の地望なり

○龍寶山大徳寺ちんねん

地をねを余

字多羅古なる釈迦仏大徳國師  
の開基あり。一は和名ハ山内海老  
住ありし一は當り加道ハ赤松園  
ん月別祐柱石の科を寺所寺云  
門ハまき寺所系長岡の家の利休  
方丈の門ハゆきまき寺の寺とあり  
山内塔は名あり所之

あぶら 安房尾二河

○超勝寺

安房尾寺智母屋不属寸奉旨  
阿弥庵佛子像を人等後初志化  
此寺像ハ中お昨中権六居家の  
存するもの同基くそ寺社評会  
より入祀新示の申す事也

小川のお天孫世子

○圓通山興聖寺

字名縁住陽成院好水尾屋あ胡  
の勅額並有り奉旨新西佛又蓮  
摩の像を安二面以坐像即中毒  
借見盤の化形威妙想ありて世  
たぐいあり若きとき虎の奇跡也

開基く虚應和尚あり

ちのふ川ゆへ

○卯石山妙蓮寺

字名白蓮園基有像上人あり  
の付後不祈雨の奉旨して日蓮  
上人自筆の法華曼荼羅あり  
後光嚴寺の法中不天下大  
弘より寺の寺をとりて桂川の  
邊不祈雨と名実大應ありと  
大南教日ふなぶあり日蓮と名  
の寺とあり

新河をくははれ口西

○大令剛山大應寺

字名天々寺云祥雲寺なり

新近の聖像開基虚名相也

○敷昌山寺大石

宗多日蓮遺跡寺門常沙字  
建互開基日親上人

○寶鏡寺百々所  
比五尼所百々所

河字名深当附沙字住

○堯天山小川の西菰野寺

字名沙土寺後不属又寺名  
阿沙尼佛坐像之人或守也  
の他開基明泉和あるて天台  
浄土の宗也

慶譽上人浄土の二寺の又寺

の付お小田明陶猪の字虎の画  
ありイロ寺名公イロ野果寺イロあり

ておありイロ寺名公イロ野果寺イロあり  
鳴虎の張る寺と好と

○具良山新所妙寺

字名日蓮寺開基日蓮上人

○具良山小川の西妙寺

字名日蓮寺開基日蓮上人

○光照院寺名官寺名

字名日蓮寺開基日蓮上人  
字名日蓮寺開基日蓮上人

柳車室河の

○羽休山龍院

宇多天皇去奉る御年此院後  
約者の此山後ハモ石山の軍倉度  
後和る天指を御傍の五現と云  
五種の善より感得も也ハ五種  
地を此と云

此山龍院

新所の上入江の園子

○三時寺

寺後百石

入江所ト云  
此寺名津王御所ト云

○大馬場寺

此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云

とらふ故りあると云代中も  
いふが何日中をぬの故として  
尾云陰ましなす

馬丸ト云

○大馬場寺

此寺名津王御所ト云

○萬年山相國兼天祥寺

宇多天皇御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云  
此寺名津王御所ト云

○利生院

此寺名津王御所ト云



宗有天台本寺某碑以聖像  
のすめアを子河他らばこの某碑  
ありわいへの仮名ア程むてい  
某碑とさるらせし

抑ら仰押ゆぬの旨

○法泉寺

宗有法泉寺と云ふ古蹟を新  
小属と云ふる何れ佛意覺  
たゆの代當と云ふ言法厚角  
之坊と号し一宗祖親慈の寺  
海有傍社の存ゆい一和より親  
密を人國ありと云の後折  
くしる小属とて宗風の流を  
わいすてふゆの中をて遷化

しほひいもい地なりある寺を  
小法泉の井のふ名井ありたの從昔  
聖人止住の時井と稱しひふふ  
水を知りし石を掘りて水を  
虎の仰らるごとく一ぬよきをた  
まづけりふ今も宗風祖廟のそ  
ありたる言の如きあり記すゆい  
よりて何名と云ふる一いゆき  
い井のふよりきりてあり

ちりふの例

○法泉寺

宗有法泉寺一と云ふ宗を新  
属と云ふる何れ佛意覺  
たゆの代當と云ふ言法厚角  
之坊と号し一宗祖親慈の寺  
海有傍社の存ゆい一和より親  
密を人國ありと云の後折  
くしる小属とて宗風の流を  
わいすてふゆの中をて遷化

形方は種しくは名に似たり  
 其の日陰に連ぬ天の皇子なる  
 又當寺の行きより三天候あり  
 享保の中權然小作と名候を  
 ころころありて天文を籍一掌  
 重徳を子の傳述かんたうしたるひ  
 天文の契候と傳く量と例と  
 左旋右旋の星とえと形と形と  
 渾天候とを細くうらしてこれと  
 之天候と号と安候好まひ言  
 ありて伝くあり祖持もちと共  
 ありてあり所は毎年を玉の  
 日三天候と号一天文と傳  
 流人小これとんせしむ

百里ありて果の由

○桂山堂と建寺

宇治のふと向一とありて  
 子屬と名まら行は居候に  
 の山化しあり寺ハ桂村之と  
 あり九代め孫は名を  
 故ありて桂を引くひは代ハ  
 西之人傳書の山化されい  
 名を西人之遠傳書に  
 といふ桂官より山あり  
 といふありて一やと建は  
 りつとちと改し

その細候とあり

○瑞雲山通光寺聖徳院

号は山ありて中ありて



櫛のあふらむはほこしと傳を  
 としたまふよしと重くして新  
 たまひにちをさす夜まきの古  
 家より七世今又此地も同縁あり  
 新くはあふらむてふくさむを  
 村をさせんとのたふおのあま  
 方より老院まゝまうて云は侍小  
 杉のまふあふ毎羽世あまを場り  
 とちよこれとんふひ別まじし  
 他まともまじくむさるの堂と建  
 たふよと後二百ふ千金と経  
 と桓武帝おとけつたふふ  
 河官使修政をせらふふさる半

小存の中あふらむとれな  
 慈一かもさるの建まの露金  
 他あゆまんとつとそとま  
 思ひまふひねもゆふ  
 是中りけりけりまふつ  
 又又年おの方あまなりあふ  
 事まふあふと通して  
 るまう。地階まむの望  
 任職ま産屋何まをせ  
 一あまの身あふと探求らんね  
 へんつらあふ山あまのまじま  
 ともいひらるあまのま  
 まをふ丹後比類ま  
 ちまの感とまふまの細

京和洋村巻六  
 百二十六

眞体と書<sup>れ</sup>るはよ<sup>う</sup>づけな<sup>ら</sup>ず  
これら<sup>ら</sup>の<sup>ら</sup>い<sup>へ</sup>に<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ず中<sup>に</sup>  
き<sup>ら</sup>ぬ<sup>ら</sup>ひ<sup>に</sup>人<sup>を</sup>見<sup>え</sup>る<sup>の</sup>い<sup>は</sup>ら  
さ<sup>ら</sup>ぬ<sup>ら</sup>も<sup>と</sup>毎<sup>に</sup>七<sup>月</sup>十<sup>日</sup>ニ  
星<sup>の</sup>の<sup>り</sup>と<sup>し</sup>て<sup>は</sup>都<sup>の</sup>門<sup>人</sup>方<sup>丈</sup>  
ふ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>ま<sup>た</sup>の<sup>ま</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>は  
人<sup>の</sup>の<sup>た</sup>人<sup>又</sup>恐<sup>る</sup>を<sup>さ</sup>せ<sup>り</sup>

花洛羽津根卷六

